



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3707号 2017.6.9 発行

小さな命 なかったことにしないで



流産や死産…。晩婚化が進み、不妊治療を繰り返してようやく授かった命を失ったという夫婦が、増えているといいます。年齢を重ねていると、次の治療を諦めざるをえない人も少なくありません。そうした中、体験を共有しようという会が、先月、東京で開かれました。

「小さな命、なかったことにしないで」

NHK ニュース 2017年6月8日

お腹に命が宿ったときから、“お母さんとお父さん”になる。そう幸せを感じていたやさきに突然、命の鼓動が止まってしまったら？



そこで語られた、心の叫び。耳を傾けてみてください。(報道局・牧本真由美記者)

語り合う空間

流産や死産。その苦しみや悲しみからどうしたら抜け出せるのか。体験や思いを語り合う会が、先月末、東京・渋谷で開かれました。集まったのは、女性や夫婦、およそ50人です。

不妊治療で授かった小さな命

6年間、不妊治療を試み、ようやく命を授かった永森咲希さん。自分の誕生日に、検査で、胎児が入る袋の「たいのう」を確認しました。

エコー画像で見た新しい命。豆粒のようにかわいくて、夫と一緒に「マメチビプー」と名付けました。ブログで成長日記をつけ、あふれる喜びをつづってきました。人生で初めての経験。幸せに満たされていました。

空へ消えたマメチビプー

一方、当時42歳だった永森さんにはちょっとした不安がありました。「高齢出産だけど、大丈夫かな」

そうした、ある日。妊娠4か月目の検診で、マメチビプーの心臓が止まっていたのです。突然の出来事でした。

“心配ばかりしてたから、マメチビプーがいなくなっちゃった”

“もう大丈夫だから。お願い、戻ってきて”

でも、願いは届きませんでした。

周りは普通にお母さんになっていくのに、なんで、なんで、私だけ、なんで？「高齢出産」だとネガティブに捉えていた自分を、責め続けました。治療の時間は無駄だったと、これまでの努力も否定しました。

周囲からは励ましであろう言葉をかけられました。「よくあることだよ」 悪気はないとわかっていたものの、違和感を感じて、心を閉ざしてしまったといいます。

だって、マメチビプーは、永森さんにとって最初で最後の命、唯一無二の存在でした。悲しみの底に沈みながらも、孫の誕生を楽しみにしていた両親に報告しました。すると、永森さんの母親が涙ながらにこう言いました。

「あなたが元気でいてくれたら、それだけでいい」

永森さんは、はっとしたといいます。“私自身も両親の大事な娘としてこの世に生まれてきたんだ” 今の自分の命を精一杯生きることにしたのです。

森さんは、治療をやめました。マメチビプーは、お腹の中で一生懸命、生きていたのです。永森さんは、マメチビプーのお母さん。その命が、生きる支えになっています。

2度の流産、そして死産

続いて、自己紹介のあいさつから涙を流していた池田麻里奈さん。

6年前に死産を経験しました。広めたい話ではないけれど、参加者のすぐるような思いを知っているからと語り始めました。

2度の流産を経験したあと、36歳で妊娠。友人に伝え、「お腹を触らせて」と言われ、周りは笑顔であふれていました。生きてきた中でいちばん幸せな時間だったといいます。

しかし、7か月を過ぎたころ、検診で、赤ちゃんの心臓が止まっていたことがわかったのです。ショックのあまり、池田さんは病室で倒れてしまったといいます。そのまま入院。陣痛促進剤を使い、通常の出産と同じようにお産の形を取りました。死産でした。妊婦さんたちがすれ違う廊下。聞こえてくるうれしそうな話し声。なぜ、どうして、どうして私だけ？ と問いました。



赤ちゃんは亡くなって産まれましたが、会うことができました。ベビーベッドに寝ていたのは、指も爪もあって、足も長い赤ちゃん。「こんなに大きく育っていたのにごめんね」「もっと注意していれば。守れなくてごめんなさい」

池田さんは謝り続けていました。

夫をパパにしてあげられなかった

火葬までの家族3人のわずかな時間。夫が声を上げて泣いていました。

“夫をパパにしてあげられなかった。夫はどんな父親になって、子どもとどんな会話をしたんだろう。それを私がストップさせてしまった”

夫への申し訳ない思いもこみ上げてきました。

赤ちゃんは亡くなくても、池田さんの体は産後の状態です。胸がはり、痛くてしかたがなかったといいます。しかし、病院に行くと、「死産の方は…」と診察を断られたといいます。自分で別の病院を探して治療を受けたそうです。

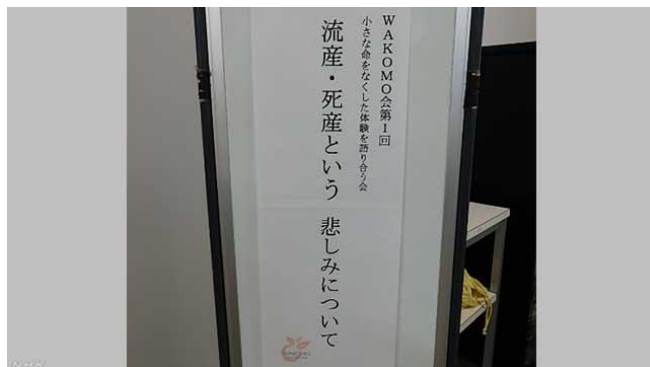
死産だと知った周囲の人たちは、赤ちゃんの名前も体重も聞いてくれませんでした。心配してくれているんだろうと思いましたが、赤ちゃんが“いなかったこと”になっていると感じたといいます。

池田さんは夫と何度も何度も話し合いました。そのとき、夫は“生きられなかった命”があるのだから、“生まれることができた自分たちの命”を精いっぱい生きよう。人生、つらいことがあったら、子どものことを思いだそう」と言ってくれたのです。

池田さんは、気づいたといいます。

「赤ちゃんがお腹に宿っているとき、私たちはお母さんとお父さんでした。赤ちゃんはこの世にいました。私たちの子どもです」

赤ちゃんは、確実にいたのです。その存在を、周りの人に理解してほしいといいます。命日には欠かさず、夫婦で墓参りに行きます。お母さんだったという経験が、池田さんを強くしてくれています。



支えたい そして 知ってほしい

永森さんや池田さんは子どもを授かることはできませんでした。だからこそ、できることがあると、同じ経験をした人が安心して話せる場所作りや相談会などを開いています。

今回、同席させてもらったのは、思いを共有して、そこから一歩進める方法を探る時間。参加したほとんどの人がハンカチで涙をぬぐいながら、話を聞いていました。「自分だけ

じゃないと思えて少し気持ちが楽になった」という声が聞かれました。

流産率は増加傾向

流産は、妊娠22週未満の赤ちゃんが亡くなってしまうこと、それを超えると死産、と日本産科婦人科学会が定義しています。

流産の原因で最も多いのは、赤ちゃんの染色体などの異常です。つまり精子と卵子が受精した瞬間に、流産の運命は決まっていることがほとんどです。母親の運動などが原因で流産することはほとんどないということです。

今、晩婚化が進み、“卵子や精子の老化”の影響で、受精卵の染色体の異常が起きやすくなり、流産する人の割合が増えています。年を重ねていると次の治療を諦めざるをえない人も少なくありません。

隣に苦しんでいる人 いませんか

では、周囲は、どのように接したらよいのでしょうか。

会の参加者の多くは「周囲の人の励ましの言葉が辛かった」と話していたのです。

「よくあること」「泣いていてもしかたがない」「次を頑張っ

て」悪気はなく、励ましてくれているとわかっているにもかかわらず、無理に気持ちを高めることができず、逆にふさぎ込んでしまうといえます。どのような言葉がよいのかは、時期や個人差、その人との関係性によって違うため、一概には言えません。しかし、参加者が口をそろえて言っていたのは、ただただ気持ちに寄り添ってほしい、そして、どうしてほしいのか、尋ねてみてほしい、ということです。

例えば、「泣きたい？泣いてもいいんだよ」「1人でいたほうがいいのか？一緒にいてもいい？」「いつでも連絡してね」

流産や死産の悲しみは日頃おおよけには語られません。周囲に苦しんでいる人がいるとわかっただけ、戸惑うこともあると思います。そんな時は、「小さな命、なかったことにしないで」このメッセージを思い出してみてください。

◆経験を語る会「WAKOMO」◆ wakomokai@gmail.com

宅配 再配達を減らす“魔法”



NHK ニュース 2017年6月8日

ネットショッピングの市場拡大を背景に大手の宅配会社やネット通販会社の間で当日配達の一部取りやめなど宅配サービスの見直しが広がっています。宅配会社側からすれば、人手不足などの事情がありますが、消費者にとっては利便性が失われると感じるかもしれません。

これに対して、早朝と夜間の配達に特化したベンチャー企業が登場しています。荷物を“魔法”のように動か

し、再配達を減らしたいという思いを込めて起業したマジカルムーブの武藤雄太社長（36）に話を聞きました。（経済部・木下健記者）

再配達を減らしたい

マジカルムーブはネット通販専門の宅配会社で、通信大手ソフトバンクの社内ベンチャー制度がきっかけとなって、ことし5月に創業されました。アスクルが運営する日用品などの通販サイトのロハコと提携し、宅配の業務を請け負っています。

配達を請け負うのは、早朝と夜間の時間帯のみ。早朝は午前6時から9時までの1時間刻み、夜間は午後9時から午前0時までの1時間刻みです。実際の配達は、地域ごとに中小の運送会社に委託し、マジカルムーブは全体のオペレーションを行うのが業務です。現在は、ほかのネット通販会社との提携に向けて、協議をしています。



社長の武藤さんは携帯電話ショップの業務管理などを行っていましたが、4年前に社内ベンチャー制度に応募し、事業化にこぎ着けました。現在もソフトバンクの社員として会社に籍を置いていますが、社長業がメインの仕事です。

Q：なぜ早朝と夜間に特化したのですか。

武藤さん：社名のマジカルムーブは、「まるで魔法のようにすっとものが

動いて届く、最適な効率でできる社会をつくりたい、そういうプレーヤーになりたい」と

思っつけました。

利用者の立場で考えたときに、昼間働いていて、自分が帰宅する時間というのはなかなか荷物を受け取れないことが多く、週末に受け取ろうとすると、どうしてもスケジュールがばらつきやすいので、それも大変です。

一方、配達する側も、不在が何回も続いたりして、苦勞されているなどというのを私もすぐ感じていたし、工夫すればきっとなんとかできるというのが起業したそもそもの理由です。

ネットショッピングが増えるのであれば、それに特化した届け方や受け取り方があっていいんじゃないかと考えました。昼間の配送というのは確かに人手不足だと思うんですけど、運送業界の中で宅配はあくまで一部です。運送業界を広くとらえると、朝とか夜に稼働している会社も当然あるわけです。こうした会社のインフラを使えば、キャパシティはまだ十分余裕があります。早朝や夜間の配達を希望する方が非常に多くてニーズがあるんだなと感じています。



WELCOME TO THE REVOLUTION.

ネットショッピング、注文はカンタン。でもその後が大変..
いつも週末まで受け取れない、そんな悲劇をなくすために。
スマホでカンタン操作、好きな時間に商品をキャッチ！

配達時間帯

- 21:00-22:00
- 22:00-23:00
- 23:00-24:00
- 6:00-7:00
- 7:00-8:00
- 8:00-9:00

※提携オンラインショップにより異なる場合があります。

は、今と少し形が違って、まずはどこのネットショッピングのサイトでも使える形でチャレンジするのがよいと思いました。ユーザーに会員登録をしてもらって要望に応じて、一度、うちの倉庫で荷物を預かって、朝や夜の時間に届けていました。

どのネットショッピングのサイトでも使えるが、一度ソフトバンクの倉庫に既存の物流を使って届き、そこからまた配送するという”2段階配送”だったため、時間がかかりました。ユーザーは確実に受け取れるが、手間がかかり、コストもかかる。ニーズの強さをしっかり把握するのはよかったですけど、このやり方がスタンダードになるやり方かと言われれば、なかなか難しいと思いました。

本来であれば、ネットショッピングのサイトを運営する1社1社と提携していくやり方がストレートだろうと思ってそちらに足を踏み出しました。

Q：今後の事業の展開をどう考えていますか。

武藤さん：AI（人工知能）の活用を考えています。今までの宅配のやり方はエリアがあって、その担当員がカバーしていますが、もしかしたら、その日の配送、荷物の状況でエリアが広がったり縮んだりして、隣と入り組んだりしたほうが本当は効率よかったです。

武藤さんはマジカルムーブを創業する前、別の会社として宅配事業を2年前から手がけていました。その2年間で試行錯誤を重ねた結果、今の会社になったといいます。

武藤さん：サービスを開始した頃

と思うんです。

しかし、それは、やはりこれまでの仕組みではなかなかできてこなかったと思います。それもAIの技術を使えば、日々エリアを変えたりしていくことも可能だと思いますので、そういった形で効率化を進めれば、より柔軟なサービス、より多くのものを届けることができると思っています。

取材を終えて

武藤さんに大切にしている言葉を聞いたときに、「時代は、追ってはならない。読んで仕掛けて待たねばならない」という言葉を挙げました。”宅配危機”は、一方ではネット通販が広がり、経済が拡大しているという健全な状態を反映したものとも言えます。危機によって、サービスの低下につながるのではなく、新しい発想で利便性を追求するこうしたサービスが次々と現れることで、経済は成長するという見方もできます。

ニーズがあればそれに応える、それが経済の本来の姿だと感じました。

部下を叱っても意味がない5つの理由 アピタル・中島美鈴 朝日新聞 2017年6月9日

管理職が部下をどのようにマネジメントしていくか、というテーマでお伝えしてきたシリーズも、今回が最終回です。今回は「部下を叱っても意味がない5つの理由」についてご紹介いたします。

アラフォー世代の私のまわりの友人たちも、気づけば部下をもつ中間管理職になっています。そんな友人達の嘆きの中にはこんな声がたくさんあります。

「今の若い新人さんって、幼いんだよね。ゆとり世代っていうのかな。ちょっとした注意でもすぐに泣いてしまうから、なんにも言えないわ」

「あれだけ厳しく言っても、部下が全然言うこときかないから、自分の体調がおかしくなりそう。イライラってほんと体に悪い」

「多分あの部下はこれまで親にも叱られたことがないんだろうね。打っても響くかんじが全くない。こっちも報われなくて疲れる」

「これまでだって、再三叱ってきたけれど、全然改善しない。もう打つ手がない」

こうした意見の裏には、おそらく次のような思い込みがあります。

① 「厳しく注意すれば、懲りて結果が出るはず」

② 「叱れば、意識が変わって行動も変わるはず」

どちらも常識的には正しいことかもしれませんが、一方で私たち人間にはこういう側面もあります。

① 毎年、忙しい年末に泣きそうになりながら年賀状を夜遅くまで書いている。

② 健康に悪いとわかりながらも早寝早起きができず、だらだら夜更かしする。

つまり、次のようなことが言えるわけです。

① 年賀状をギリギリになって夜中まで書く羽目になって、痛い目を見て懲りているにもかかわらず、のど元過ぎれば熱さを忘れて、毎年同じ目に遭う。

② 誰だって早寝早起きが良いことは知識として知っているのに、夜更かしをする。

このように、知っていることと、実行することとの間には、ずいぶんと開きがあるので。このため、「あいつはだらしない」とか「やる気が無い」「自立心がない」とくり返し叱っても、何も解決になりません。だいたいこういうセリフは、説教のときに使われますね。

ご参考までに、こうした説教や厳しく叱ることは、行動分析の世界では「罰」の一種として位置づけられます。でも、世間一般で言われる「罰」と、行動分析の世界でいわれる「罰」とはちょっと意味が違うというお話をしましょう。行動分析における「罰」とは、ある行動を減らすために結果を操作することを指します。一般的に用いられる制裁としての「罰」と、少し意味が違います。

例えば、テーブルの上に来客用に用意したおまんじゅうがあったとしましょう。何も知

らないこどもが「あ！おいしそう！いただきます！」と手を伸ばしておまんじゅうを食べようとしたとします。この時、多くの大人は「だめ！食べちゃダメ！」と素早く注意するでしょう。早く介入しないとおまんじゅうがなくなってしまうわけですから。子どもも、「！？え？」と驚きながらも、いったん手を引っ込めることでしょう。

このとき、おまんじゅうに手を伸ばすという行動は、大人からの「だめ！」という叱責で減らされています。なので、この場合の大人のかかわりは「罰」ということになります。

一方で、車を運転している時、「止まれ」の標識のところで一時停止をおろそかにして、スピードを少し緩めるくらいで通過するという行動があったとしましょう。それを、物陰から見張っていた警察に見つかり、違反切符を切られたとします。これは、制裁としての罰を与えられたわけですが、その後も一時停止を怠るという行動が減らなければ、行動分析としては罰と言えないことになります。

私たちの周りには、罰がたくさんあります。

悪いことをしたら捕まるのだって、廊下に立たされるのだって、部活をさぼったらグラウンドを走られるのだって、遅刻をしたら減給されるのだってそうです。

罰は即効性があり、昔からよく用いられてきました。

しかし、アメリカの心理学者は、こうっています。「行動を変容させる手段として罰を用いることは効果がない」(Skinner,1953)。スキナーは、道徳的な見地からではなく、相手の行動を変えることができるかどうかという視点から言っていることがおもしろいのです。

叱ること(制裁として罰を与えること)は、部下の行動を変えるためのマネジメントに有効とはいえません。その理由を、子育てに置き換えて以下の5点にまとめてみました。

理由その1：代わりにどう行動したらいいか伝わらない

冒頭の、おまんじゅうに手を伸ばして叱られた子どもの話に戻しましょう。子どもは、「おまんじゅうに手を伸ばすと、叱られる」ということはわかりますが、代わりにどう振る舞えばいいかはわかりません。ものすごく空腹なら食べてもいいのか、誰かに相談をすればいいのか、わからないわけです。野球のバッティングの練習で、「それではだめだ！」とだけ注意されても、じゃあどういうスイングをすればいいのわからないのと同じです。代わりにどう振る舞えばよいかかわらなければ、おそらく問題行動は続きます。

理由その2：効果が続かない

一度叱られておまんじゅうを食べなかったとしても、時がたてばまた、食べようとするかもしれません。「誰も見てないし、叱られなければいいや！今のうち！」という心理です。毎年年賀状をギリギリになって夜中まで書いて「懲りた！」と思った人が、また懲りずにギリギリになってしまうのと同じです。これを「回復の原理」といいます。

隠れて悪いことをするようになる、バレないように画策するというのもやっかいな点です。

理由その3：罰をどんどん強くしなければならぬ

初めのうちは「だめよ」と軽く注意すれば、おまんじゅうを食べなかった子どもがいたとします。しかし、子どもはだんだん、そのくらいの注意ではきかなくなってきました。すると、もっと大きな声で注意しなければならなくなるでしょう。子どもの側も慣れてしまうからです。子どもを叱り続けて、夏休みの終わりにはのどが痛くなるというお母さんは多いはずです。

理由その4：積極性を奪う

「だめ！」と注意されると、その後、叱られないようにその子どもは萎縮して何にも意見をいわなくなるかもしれませんし、おまんじゅうを食べさせてもらえるような交渉をしないかもしれません。積極性が失われてしまうのです。さらに、親と子どもの関係も悪くなり、子ども自身も「自分は悪い子だから叱られるのだ」と考えるようになります。

理由その5：罰の連鎖

お母さんに叱られた子どもが、妹や弟に対しても母親と同じような口調で叱っているの

を見たことがありますか？ または、散々ひどいパワハラ上司のもと働いてきた人が、「あんな上司にはなるまい」と思いながらも、部下に同じようにパワハラをしてしまうこともよくありますよね。されたことを、他の相手にしてしまうことが、似たような力関係で起こりうるのです。



こうしてみると、説教やペナルティ一制度が、長い目でみるといかに無意味かわかりますね。「罰」で管理されている職場は、社員が萎縮していて、無難に、叱られないようにという点にのみ神経を集中させていますから、新しいことを提案する風土はまずありません。やる気や積極性ももちろんありません。

一方で、こうすればこんないい結果が得られると広く周知された職場では、社員が積極的です。新しいアイデアも出てきて、やる気に満ちています。

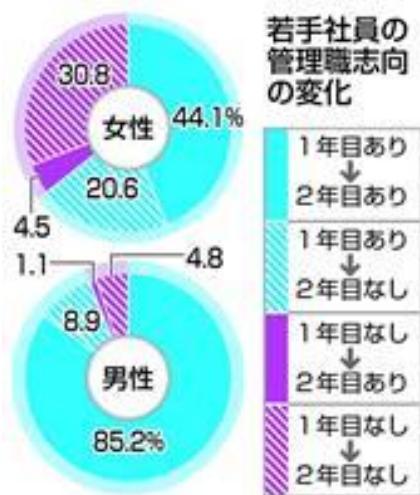
知識と行動の間に開きがある、という事実から目を背けず、具体的にどのような行動に移すべきか、その行動を増やすためにどのような仕組みが必要か、というところまで手を打てるのが、

うまくいく管理職です。

さて皆様の職場、家庭はどちらでしょうか。

「女性は入社2年で管理職への意欲低下」 女性教育会館調査

産経新聞 2017年6月9日



「女性は入社2年目には管理職への意欲が大きく低下する」一。独立行政法人国立女性教育会館が平成27年に入社した男女を対象に実施した調査で、こんな傾向が浮かび上がった。男性は女性ほど下がっておらず、女性が入社後早い時期に、仕事と家庭の両立の難しさを知り、意欲をそがれている実態がうかがえた。調査は正社員800人以上の企業の社員を対象に27年と28年に実施、両方に答えた745人の回答を分析した。

1年目に「管理職を目指したい」「どちらかという目指したい」とした女性は64.7%だったが、2年目には44.1%に低下、20.6%が管理職志向を失った。

2年目に意欲を失った女性に理由を聞いたところ、「仕事と家庭の両立が困難になる」(64.4%)が最も多く、「自分には能力がない」(45.8%)、「責任が重くなる」(32.2%)が続いた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
 大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

